

Title	響堂山石窟(東方文化學院, 京都研究所刊)
Sub Title	
Author	杉本, 忠(Sugimoto, Tadashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.16, No.4 (1938. 4) ,p.208(706)- 209(707)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380400-0209">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380400-0209</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の封土を失つて石室構築の全形を殆ど裸出し、嘉永元年に出た西國三十三所名所圖會にも既に記載せられた著名な巨石古墳にして、當古墳に對しては過ぐる昭和八年及び昭和十年の二回に互り、日本學術振興會の援助に依り京大文學部考古學教室及び奈良縣史蹟調査會とは共同調査を行つたが、本書は其の待望の調査報告である。

内容は濱田耕作博士が大和島庄石舞臺の巨石古墳と題して、古墳内外の構築より石室内外に發見の遺物に關し細述し、石舞臺西北の小古墳にも注意を怠らず、考説の章に於いては石舞臺を方形墳の範疇に入れ、其の築造法より築造年代に論及し西紀六七世紀頃と歸結し、最後に被埋葬者の問題をも取上げて、『當古墳を歴史上の一定の個人の墓に擬定せんとするならば蘇我馬子の桃園墓とする説を以て最も有力なる假説とする外はないであらう。』と結んで居る。

更に附録には高橋逸夫氏の石舞臺古墳の巨石運搬法並に其の築造法と題して、力學的立場より興味ある一應の推論を試みて居り、又、斯學研究者にとつて便利なものとして、梅原末治氏の日本古墳巨大石室聚成及び日本方形古墳聚成がある。

本書は本文八十七頁・英文九頁・玻璃版圖版四十五葉・原色版・別刷圖版・聚成圖數葉・四六倍版洋装にして、とにかく大規模な高塚古墳として其の石質内に完備せる排水施設あり、而も空渾と外堤とを有する方形墳を取扱つた調査報告なだけに、種々示唆に富むは論を俟たない。

石室構築に於ける石材構築法の問題を取つて見ても、棋式(chess)

(chess system)を採用せずして楯式(intel system)に一貫せる我國の墓室は、玄室を擴張せんがためには巨石の必要を生じ、殊に本古墳の如きは、上部天井の壓力を外方にレリーズせしむ可き目的の爲め、玄室兩側壁に於ける中段の石に甚だ奥行あるものを使用して居る等は頗る興味のある所である。

最後に本書は濱田耕作博士の直接關係する最後の報告との事にて、大正六年以來既に十四冊の貴重な研究報告を學界に送つて來て居る京都帝大文學部考古學教室の絶えざる活躍に對し敬意を表すると共に、吾人は博士去るとも同教室の今後の努力を斯界の爲更に期待してやまぬ者である。

(昭和十二年十一月廿五日西岡秀雄)

### 響堂山石窟

(東方文化學院  
京都研究所刊)

本書は東方文化學院京都研究所の水野清一・長廣敏雄の兩氏が昭和十一年三月より五月にわたる北支那旅行中調査された響堂山石窟に關する報告である。響堂山は一名鼓山とも云ひ、河北省磁縣・河南省武安縣にわたつて南北に走つて居り、本書によるとその南部(河北側)には東魏の作かと思へる佛龕、二層に分れた七箇の北齊の洞窟、及び唐の洞窟があり、その間に散在して隋・唐の小佛龕が存在し、北部(河南側)には北齊の洞窟三箇、唐・宋・明の洞窟各一が開鑿されて居ること、本書にはそれら全般にわたつてなされた綿密な調査及び考察が發表されてゐるのである。

本書は先づ前記洞窟の箇々に就いて、構造・造像・後刻佛龕・銘刻その他必要なる事項にわたり詳細なる記述をなし、次にこれらの中本書の主題とも云ふべき北齊石窟群に就いて、その共通の特徴、他の場所他の時代の石窟との比較、その北齊窟と見られる所以等が論ぜられて居り、六十五の圖版・四十八の挿圖の他、附録として(一)響堂山彫刻零拾、(二)響堂山附近の歴史地理、(三)響堂山石刻録の三項が附加せられ、一に於ては破壊され他所(支那・本邦・米國)に將來せられた彫刻を圖版と共に記して、近年の拙劣な修補俗惡な塗抹を被らざる響堂山彫刻の倂を傳へ、二に於て附近の歴史地理を考察し、この地が北齊時代の二要地たる鄴と晉陽との重要な交通路に當り、有力者によつて石窟開鑿の行はれた可能性の考へられることを記して、北齊説を傍證し、三に於て洞窟の内外に石刻された經文・佛名・造像記・供養記・侍佛記・題記その他の銘刻が悉く輯録されてゐる等、頗る完備を極めてゐる。

支那佛教美術の考古學的研究に向つて、石窟寺院の調査が重要な價値を有してゐることは申すまでもないことであり、木造の伽藍が崩壊と重建を経て昔日の倂を止めない中にあつて、石窟寺院のみは獨り六朝隋唐の創建に近い姿の儘で今日に遺存してをり、その中に見出される佛像も、その數量に於いてまた規模に於いて、遙かに遊離した石佛等の諸像を凌駕してゐるのみならず、像相互の様式的聯關を考へ、また地方的性質を察するには、これを措いて他に好適な資料があるとは思はれないとは、濱田博士の本書に寄せられた序文の一節であり、尙博士は比較的良好に知られた雲崗・

天龍山・龍門等の石窟に對し、これまであまり注意されてゐなかつた此の響堂山石窟の調査は六朝美術の研究に重要な資料を寄與するものといはねばならないと記されてゐるが、蓋し本書の目的及び價値を端的に言盡されたものといへやう。

昨年來の戦火の中にあつても、大同の石佛石窟の保護されたことは報道せられたが、このあたりは如何であらうか。例へ戦火は免れることが出来ても、多少の破壊盗出は免れないのではないかと危まれ、その意味に於いて事變直前に出版せられた本書は、一面には遺憾な事ながら、一層その價値を増大してゐるかも知れない。併し今回の事變が東洋史上必然の運命である以上、多少の犠牲は美術の分野にあつても覺悟しなければならぬことであり、却て我々は事變後明朗化された新しき支那によつて、安全にして自由な調査研究の便宜が與へられ、本書にも一言せられてゐるやうな調査上の不便の一掃せられることを期待すべきであらう。(杉本忠)

## 日本古文化研究所報告

### 第六 怡土城址の調査(鏡山猛氏著)

筑前の怡土城は築造年代が明らかであり、且又それが我國最古の城址の一である爲築城史上に最も重きをなすものである。その上この城郭は吉備眞備なる史上の大人物が入唐後その得たる新智識により築城し、その目的が新羅征討の一の現れ(二頁)であるといふことを考へたならば、その國史上に於ける役割も亦極めて